

## 男はつらいよ（第27作）「浪花の恋の寅次郎」 宝山寺のシーン

(1981年8月8日 公開)

### <車寅次郎（渥美清）と浜田ふみ（松坂慶子）が「宝山寺駅」で下車>

料理旅館や土産物店が並ぶ坂と石段の聖天通りを過ぎ、杉木立に灯籠が並ぶ石段の参道を上がり、鳥居をくぐって山門を入ると、江戸時代よりの商売繁盛の生駒聖天さんで知られている真言律宗生駒山「宝山寺」

何でもありの現世利益を求める参拝客で賑わう。

絵馬堂にかけられたたくさんの絵馬には、何でも書いてある。



山頂の開山堂を目指して石段を上がり、山頂からの眺めは抜群で、河内平野が一望できる。

寅「どうだい？景色のいいところでもって、弁当でも食おうよ」

ふみ「まだ着いたばかりやないの」

寅「これ登るのか！？うわあ〜」

ふみ、笑いながら、寅の背中を持つ。石段を上りながら、フーフー言っている二人。

ふみ「いや、こんな山の上に大昔どうやってお寺建てたんやろ」

ふみのほうがフーフー言っている

寅「オレの故郷にだってこういうお寺あるよ。帝釈天」

ふみ、寅の腕を組んで、登っていく。



寅「これより小さいけどな、その参道にさ、店がずーっと並んでて団子屋があるんだよ。その中の一番古い団子屋がオレの家だ」

ふみ「いやあ、そんな古いん…」

寅「ああ」

ふみ「ふうん、いつ頃建てたん？」

寅「あーあれはね、奈良時代かな、きっと」

ふみ「…？」

寅「そこに古びた夫婦がいるんだけど、あの二人も奈良時代からいるんじゃないかな、きっと」

ふみ「ふふふ、また嘘言うてえ」

家族連れ的女性がふみを呼び止める。

女性「すみません奥さん」

ふみ「はい？や、うち？」

嬉しそうなふみ。



女性「ちょっとシャッター押してもらえませんか」

ふみ「はいはい」

女性「お願いします」

ふみ、寅の方を向いてニコーと笑う。

男性「すみませんね」

ふみ「ここ押せばよろしいん？」

女性「はい」

ふみ「へえ」

男の子と女の子とお父さんお母さん。

ふみ「お嬢ちゃん、おいつつ？」

男性「まだよう言いませんねん」

カシヤ

ふみ「もう一枚撮りましょか」

女性「お願いします」

男性「お宅はお子さんまだですか」

ふみ「はい、まだです」

カシヤ

寅、そのセリフ聞きながら照れまくり。



男性「おおきに」

<宝山寺の境内>

絵馬堂

絵馬に二人とも何か書いている。

『妹さくらとその一家がしあわせになりますように 寅次郎』

ふみ「へえ、寅さん妹おんの？」

寅「うん、さっき話した団子屋で働いてんだよ」

ふみ「ねえ、妹って可愛い？」

寅「べーつにい～、何だか姑みたいに文句ばかり言ってるよ、～～～」



寅「ふみちゃん、何書いたんだい」

ふみ「ん？寅さんにええお嫁さんが来ますようにって」

寅「うそだ～え、うそだよー、

そんなこと書くわけないよ、フフ、でも、ちょ、ちょっと見せてやってくれる？」

ふみ「あかん、いや、いやー」と隠そうとする

寅「ちょっと、見せてよ」と、さっと取ってしまう。

寅「ハハハ」



寅、絵馬を眺め、はっとする。

『弟が幸せになりますように。ふみ』



ゴーン

寅「弟がいたの？」

ふみ「うん」



寅「へー、両親が早く亡くなって、おばあちゃんがこの間死んで、一人っきりになったってそう言ってたじゃねえか」

ふみ「母さんが家を出る時、ちいちゃい弟連れてったんよ」

ふみ、絵馬を棚に奉納しながら、

ふみ「まだ、五つか六つやったけどねえ…昔のことよ」

寅「ふうん…」

ゴーン

寅「弟がいたのか…」

### <参道の食堂>

食堂で、ビールを飲みながら、ふみが作ってきたおかずを食べている。

ふみ「このお芋食べてえ」

寅「うん」

ふみ「夕べ一晩かけてウチが煮たんよー」

寅「ん、これだろ、食べてる食べてる、ん、こりゃ、手数かかってたいへんだっただろう、こういうの作るのな…」

ふみ「そうよ」

寅「醤油ねえかな、ちょっと…」

ふみ「フフ…」

寅「え？」

ふみ「やっぱり」

寅「ん」

ふみ「味が薄いんやねえ、関東の人には…」

寅「いや、そうじゃないんだよ、オレは貧乏人のガキだからねえ、辛くないとおかず食っているっていう気がしないんだよね」

ドバァーっと醤油をかけてしまって

寅「あーあ、ハハ、かかりすぎちゃったよ」

ふみ、苦笑い

ふみ「あー、フフフ」

寅「あー…」



店員「はい、いらしゃいませどうぞ」

客「ここでええやん。こんにちは」

店員「いらっしゃいませ」

客「僕ビール」

寅、ビール注ぎながら

寅「そいじゃあ、おふみさん、おふくろさんの手料理の味ってな、知らないわけだ？」

ふみ「台所で働いてるの、見たことも無いよな母ちゃんやったからね。ほんとと言うと、母ちゃんと別れるより、弟と別れる方がよっぽど辛かったわ」

寅「へえー…、可愛い子だったんだらうね」

ふみさん、白いジャケット脱いで、

ふみ「色が白うてね、女の子みたいに気が優しくうて、ウチ、いつも抱いて寝てたんよ」

寅「ふうん、今どうしてるんだい、その弟は？」

ふみ「大阪で働いてるらしいの。…もう二十四やもんね、ひょっとするとお嫁さんがおるかもしれんね」

寅「…！じゃあ、ずっと会ってねえのか？ 小さい時、別れたつきり」



ふみ「そうよ」



寅「どうして会わねえんだ」

ふみ「おうたってしょうないやない。こっちは懐かしいとおもたかって弟はうちの顔なんかろくに覚えてへんのよ、お

まけに芸者なんかしてるんやもんね、嫌な顔されるのがおちよ」



ふみ、ちょっと淋しそうに笑って、ビールを持って

ふみ「はい」と注ごうとする。

寅、真剣な顔になって

寅「いや、ちよ、ちよ、ちょっと待てよ」



メインテーマがゆっくり流れる。

寅「五つか六つの時に別れたんだろ」

ふみ「うん」

寅「じゃあ、覚えてるよ、弟は忘れやしないよ。よーく覚えてるよ。毎晩抱いて寝てくれた姉ちゃんのことをさあ。オレだってガキの時分にウチ出て長い間フーテン暮らししてたよ、だけど、片時だって肉親のことは忘れなかったよ。会ってやれよ。こんな広い世の中にたった二人っきりの姉弟じゃねえか、会いたくねえわけはねえよ、な」

ふみ、考えている



ふみ「そうかね、そんなもんかね…」

寅「住所分かってんだろ」

ふみ「うん…、働いている運送会社の名前はね」

とハンドバックから赤い手帳を取り出してめくる。

寅「オレ、一緒に行ってやるよ」



腕時計を見て

寅「まだ昼だから」

ふみ「え？今日？」

寅「あたりめえだよ、思い立ったらすぐ行こう！はやく！ほら！」

< 2人を乗せたタクシーが大阪港に向かって走っていく。 >

この記事は、

男はつらいよ覚え書ノート (<http://www.yoshikawatakaaki.com/lang-jap/otokono-to.htm>) さん

の

第27作 男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎 (<http://www.yoshikawatakaaki.com/lang-jap/27saku.htm>)

から引用させていただいて作成いたしました。